

ISSN 0910-2396

野鳥たより

—北海道—

第 67 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和62年3月21日



ハギマシコ 61. 3. 11 岩見沢市朝日町 撮影者 若林 信男



もくじ

私の探鳥地(神楽岡公園)	富川 徹	2
小樽市の鳥「アオバト」について	渡辺 俊夫	3
新年懇談会		5
聞きなしの民話(3) ハト類	武沢 和義	7
近況報告	泉屋恵津子	8
高橋さんの遺稿を読んで	高崎 一夫	8
小樽港にコクガン渡来	富川 徹	9
探鳥会報告		10
鳥見行クロスワード	竹内 強	12
探鳥会案内		13
鳥民だより		14

私の探鳥地 ⑧

神楽岡公園 富川 徹

旭川で時間があれば足を運んでみるのが、上川神社に隣接してある神楽岡公園である。旭川市内の南方1.5km程の忠別川を臨んだ丘陵地で神社用地を含め約50haの面積を有し、都市公園として古くから市民に親まれている。

子供の頃はこの辺りで育ち、年始の神社参りから冬は崖スキー、春はカエル、サンショウウオの卵採り、夏はセミ、クワガタ、チョウの昆虫採集やトジョウ、ヤツメなどの魚採り、そして秋は木の実、紅葉収集、またキャンプやクラブ活動のトレーニング場として四季を通じたフィールドアドベンチャーとの付き合いは思い起せば限らない。私にとっての自然・冒険の心を養われた郷里である。

しかし、近年この周辺は市の用途地域として宅地開発が進み、特に忠別川は河川改修の整備で様相も変わった。訪ずれるたびに市街地の中にとり残された緑の孤島に化しつつあることに空しさも感じるが、懐かしさが先立ってか無心に鳥を探したくなる。

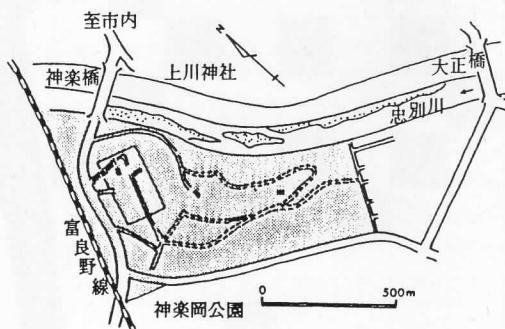
公園地と丘陵地の林相は下刈りなどの手加えられているものの、概念維持され、ミズナラ、カシワ、ハルニレ、オニグルミ、カツラなどの広葉樹林であり、神社のトドマツが見事な大径木になったことには驚く。春には花見客で賑わうエゾヤマザクラの林と中央の広場、麓には大雪山連峰から注ぐ忠別川、その川沿いには多少にもヤナギの群生が残存しており、市街地にあっては森林、河川環境ともに比較的自然が保たれているといえよう。

思えばカラスの巣に石を投げ入れ数羽のカラスに糞爆弾を落されたことや、ムクドリ(桜鳥)の巣穴に手

を入れ持ち遊んだことなど、今考えれば悪事ばかりなのには反省させられるが、昔からカラスには好適な地となっているようだ。

通常、ハンボンガラス、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ハシブトガラ、シジュウカラなどは気軽に逢える仲間で、春から夏にかけてはカッコウ、アカハラ、クロツグミ、センダイムシクイ、オオルリ、アオジが林内で美しい声を聞かせてくれる。また聞き耳を立てればヤマゲラ、アカゲラのドラミングの音が響き、川沿いに出ればトビ、チゴハヤブサの飛翔も見られる。林内が静まりかける秋から冬では慌しそくに活動するカラ類の混群やキツツキ類、ヒヨドリ、カケス、ウソ、ツグミなどを窺うことができ、旭川の鳥とされているキレンジャクの群れにも出逢える。川の浅瀬の岸ではカルガモ、コガモなどの水鳥の姿も観察でき、あわよくばオジロワシも出現する。

身近かな自然はバードウォッチングには格好の地であると同時に、神楽岡公園一帯の位置環境が渡りや移動する鳥の経路として休息・採餌の場になっていることは請け合いで興味ある地でもある。



〒064 札幌市中央区北6条西28丁目 円山北町団地
3-203

小樽市の鳥「アオバト」について 渡辺 俊夫

はじめに

皆様すでに御承知の通り昨年5月10日バードウィーク初日に小樽市の鳥として「アオバト」が制定され、小樽市としては昭和43年の市の花「ツツジ」市の木「シラカンバ」制定以来実に18年ぶりのシンボルの誕生でした。

何故小樽市の鳥として「アオバト」が一番ふさわしいのか？ 実は市民の自然保護思想の普及と青少年児童の情操教育の為に有意義できわめて価値の高いものを、市の鳥のシンボルとして制定しよう。このスローガンを合言葉に日本野鳥の会小樽支部が中心となり6年前からアオバトをNo.1の候補として運動を続けてきました。これには皆様本紙探鳥地案内及各出版社より発行されております案内書等で御承知の通り小樽市張碓海岸の恵比須島附近(図1)はアオバトがすぐ目の前でしかも集団で海水を飲む姿が観察出来る場所として日本中の鳥類研究者並びにバードウォッチャーから最高の折り紙がつけられていることです。日本広しといってもこの様な光景がみられるのは全国でも張碓海岸だけです。森林性の鳥でありながらこの様な習性をもつことは学問上注目し又この光景についても他に日本の数ヶ所で観察はされているものの、前述の様にすぐ見近で容易に観察できる所はなく、従ってこの張碓海岸は学術的にも貴重であり、さらに野生生物の減少が危惧される昨今にあっては自然環境保全の為に大切に保護しなければならない。

以上アオバトは小樽市の鳥として誠にふさわしく小樽のシンボルとして又平和のシンボルとして花・木同様のつまでも見守っていききたいものである。

形態及習性

アオバトは翼長181~188 m/m、尾長103~130 m/m、嘴峰17~20 m/m、附蹠24~28 m/m。体色は全身オリブ色かかった緑色で嘴はセージ色で脚は赤く特に目は美しく深紅のルビー色をしている。特に雄では肩羽・両覆羽が赤褐色なので区別は容易に出来る。各部の測定値について表1に示す。これは雄が昭和58年7月10日小樽市奥沢小学校に落下したもので雌は同7月16日に張碓海岸でハヤブサにおそわれたものを測定したものである。

表1 単位 mm

	嘴峰	翼長	附蹠	尾長	体重	全長
アオバト ♂	21	195	27.5	130	—	—
♀	18	185	25	122	280	283

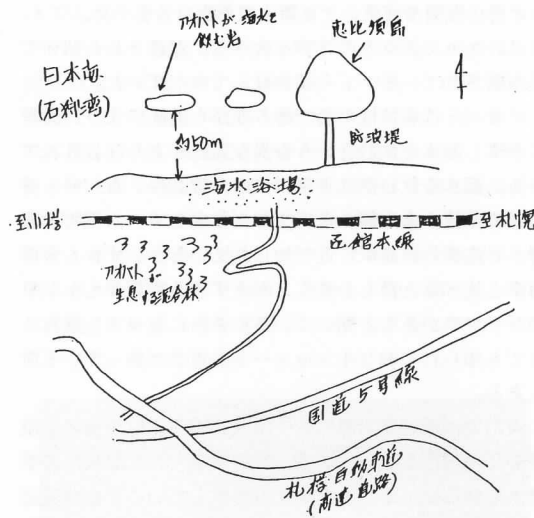


図1 張碓海岸アオバト飛来地

鳴き声は柔らかみのある声でアーオオ・アーオオ・アーと独特の声で鳴きアイヌの人々はこの鳥をワウと呼び鳴き声から付けたと言われている。張碓海岸の恵比須岩(島)はアイヌ語でワウシリすなわちアオバト島(シリ→島)と呼ばれていた。張碓一帯はワウシリ(和字尻)という和名がついた最近まで残っていたことを考えると如くに多くのアオバトが生息していたか容易に察しられる。

生息環境は日本固有の鳥として日本全土に広く分布し北海道では一般に新緑の頃飛来し晩秋の頃越冬地の四国、九州方面に渡去する。

張碓地方(小樽地区)では5月下旬から始まり6月上旬には姿や声がミズナラ、カエデ、シナノキ、セン、エゾマツ、トドマツ、ホオノキ等の針広混交林でよく観察される。

この頃から繁殖期に入り、食物となる木の実の多い所に分散して営巣すると思われるが小樽地区ではまだ営巣の様子は確認されていない。

営巣状況がなかなか確認出来ない問題として

- 1) 全身緑色をしたアオバトが新緑の樹木の中での行動は完全に保護色になり又臆病な鳥で人の気配等を感じるとすぐ鳴き止みじっと静止してしまうこと。
- 2) 他の小鳥類は雛が生まれると虫類等を運ぶ為、巣から頻繁に出入りし又虫をくわえて運ぶ姿も見られる

が、アオバトはハト類特有のそのうから分泌する鳩乳 (pigeon milk) で育雛が行われる為飛翔している姿を確認出来てもそれが育雛動作なのかどうか、等が主な要因である。

食性はエゾヤマザクラ、ウワミズザクラ、ナナカマド、ミズナラ、ノブドウ、ヤマグワ、エゾニワトコ、サクラソボ等の堅果や液果、マツ類、広葉樹の若葉や芽、ウメ、クリ、ニセアカシヤの花等も食べる。保護された個体では市販されているブドウ類を好んで食べていた。

アオバトは森林性の鳥でありながら前述のように海岸に飛来し海水を飲むという奇異な習性があり注目されている。海水を飲む例は神奈川県の大磯海岸、香川県と愛媛県の県境の余木崎、道内では当張礁海岸、八雲町の海岸、日高線の清鼻駅付近で知られているがいずれも張礁海岸と比べると群も小さく、おとずれる周期等もかなりのバラツキがあると聞いている。さらに温泉水を飲むことでも知られておりオンセンバトの方言が残っている所もある。

道内では雌阿寒山麓の野中温泉、中標津町の養老牛温泉等での報告を聞いている。最近美瑛町白金温泉にも温泉水を飲みアオバトが集まり吸飲している写真が報道され話題になったが白金温泉に行く機会に恵まれ、観察したが当日は(9月6日)27羽の群が温泉の廃湯を飲んでた。(時間がなく午前7~9時の2時間のみ)ホテルの支配人の好意により当温泉の泉質分析表を見せて頂いた所、ナトリウムイオンが主成分であるが塩素イオンが2番目に多く含有されている。このことは海水を飲む習性は塩分を生理的に要求するものがアオバトにあるのかどうか? いずれにしてもこの習性を持つ実際の機能は不明な点が多く今後の研究課題でもある。

以下小樽市張礁町におけるアオバトの海水吸飲について日本野鳥の会小樽支部が行った調査(昭和58年度)を元にして述べてみたい。

1. 渡来する時期及び渡去する時期

昭和49年からの記録によれば初認日で最も早かったのは、昭和55年の5月25日で次が昭和57年の5月29日となっている。終認日は昭和58年では10月16日、昭和57年度の場合で10月26日である、従って毎年渡来する時期は5月下旬で渡去する時期は10月下旬とみなされる。(図2参照)

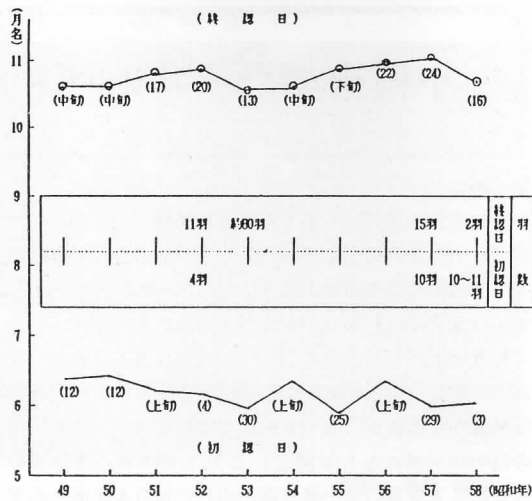


図2 各年の初認日と終認日

()内の数字は日を表わす。確認のあるものは羽数も示した。

2. 岩礁に飛来する個体数及飛来回数と吸飲回数

図3及図4に昭和58年度における月毎の飛来個体数と1日平均飛来回数及海水吸飲回数を示した。

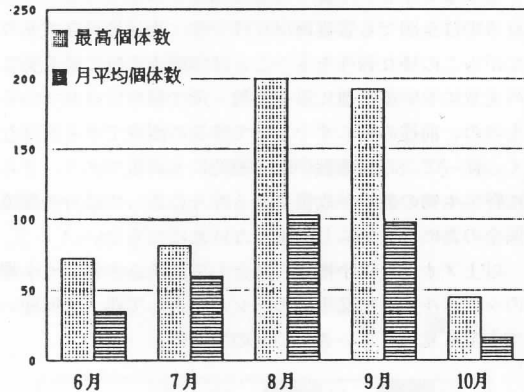


図3 月別、1日平均飛来個体数と最高個体数

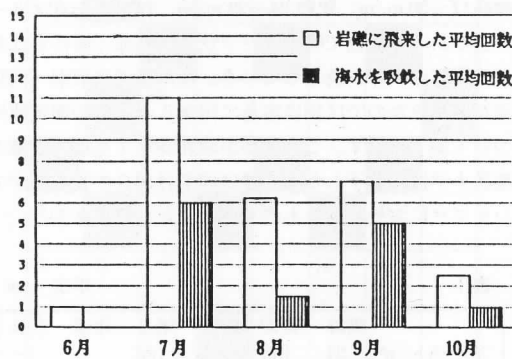
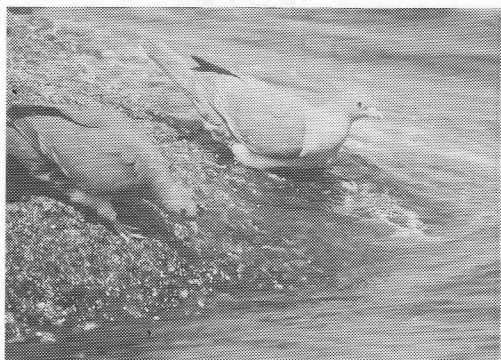


図4 月別、1日平均飛来回数と同じく海水吸飲回数

吸飲で海岸に飛来するのは早朝から日没近くまで度々くり返される。曇天でも訪れるが特に真夏の日射の強い晴天時は一気に集まり出し、海辺が海水浴客で埋まっている状態でも上空を巡回し、強引に吸飲していく。岩礁が海水浴客で占領され、降りることが出来ない場合直接海上に着水し吸飲していく光景もみられる。吸水の際は矢張り警戒心が強く岩礁に降下すると同時に一気に海水を吸飲し終ると直ぐに飛びたってしまう。なお吸飲の仕方は、他の陸鳥がするように一口含んでは上を向いて飲むしぐさではなく嘴を海水に入れたまま飲むので大量に飲んでいる様に見える(写真参照)。



運がよければ目の前を200羽位の個体数が何度も巡回しながら岩礁に降りたつ際は誠に壮観で美しく素晴らしいものである。ここで8月度が他の月と比較し海水吸飲回数が少ないのは夏場は海水浴場にもなる為海水を飲み飛来しても海水浴客に岩礁を占領され降下することが出来ず何度も引き返す状態が続く為である。生理的に限界がくると前述のごとく海上に着水を試みると考えるのは人間の思想なのかも知れないアオバトに聞いてみたいものである。

昭和58年の観察結果の詳細を図5(次ページ)に示す。観察中しばしばハヤブサの攻撃、ウミネコとの岩礁をめぐる場所争い、図1でも示すとうり国鉄函館線沿線の為列車通過、並びに前述の海水浴客等がアオバトの飛来、吸飲を阻害している主な要因である。

小樽市の鳥アオバトの保護

以上小樽市の鳥アオバトについて述べてきたが市の鳥「アオバト」が制定されるにあたりかつて車イスで市に陳情を繰返し昨年四月志半ばにして世を去った当会前顧問佐々木勇氏の姿が今も忘れられない。

前日本野鳥の会小樽支部長でもあった佐々木氏は昭和3年頃から張碓海岸に飛来するアオバトに関心を持ち、アオバトの生態観察を続け54年には張碓地区の鳥獣保護地区指定を実現させ、又55年から市の鳥への指定運動に奔走し市や市議会へ陳情を繰返し、昨年5月に佐々木氏の遺志は市の鳥制定という形で結実したが、一貫してアオバトの保護を訴え続けてきた姿勢は今後私達に受け継がれ、このアオバトの生息地を将来的にも郷土のほこりとし自然の特徴を知り、ハヤブサ等鳥類その他の動植物も含めた生の営みを知り、自然と人間が調和し、永久に存続していける様な素晴らしいサンクチュアリーにしていきたいものである。



引用文献

1. 原色日本鳥類図鑑 小林桂助
 1. 小樽市張碓海岸のアオバト
生息地保護のための調査報告書 (財)日本野鳥の会発行
 1. 動物と自然 ニューサイエンス社
 1. あおばと 佐々木勇
- 写真提供 中野高明氏
〒047-01 小樽市新光4丁目14-4

新年懇談会

62年新年懇談会は1月24日、北海道婦人文化会館で行われた。あいにくの荒天で、参加者はやや少めだったが岩見沢などからの参加もあり33名となりました。

今回はウトナイ・ネイチャーセンターの安西氏を講師に招き、「ネイチャーセンター裏話」など普段はなかなか耳に出来ない面白い話を落語家、顔まけの名調子で聞かせて

もらい、一時間半にも渡り一同、抱腹絶倒しました。

その後、参加者持参のスライド映写会に移りましたが残り時間が少なくなり、遠来の岩見沢勢の写真を優先的に見せてもらいました。場所を移し酒宴となり大いに盛り上がり、相当に出来上がった人もいましたが、それでも足りずに2次会にくり出す元気な人達もいました。

恒例の新年懇談会も会の大切な親睦の場として定着しました。来年は一層の参加を期待しています。

図5 張碓えびす島における観察記録 58.6.4 ~ 58.10.23

調査日 時間	6月				7月				8月				9月				10月				備考				
	4	12	19	3	9	10	17	24	3	6	7	12	21	28	4	11	15	18	23	25		2	10	16	23
10:00~16:00	晴	晴	晴	晴	晴	快晴	小雨	曇	晴、曇	晴	晴	晴	小雨	晴	曇、風	曇	快晴	快晴	曇	曇	晴のち雨	晴	晴	9:20~11:30	
天気	晴	晴	晴	晴	晴	快晴	小雨	曇	晴、曇	晴	晴	晴	小雨	晴	曇、風	曇	快晴	快晴	曇	曇	晴のち雨	晴	晴	9:20~11:30	
(A) 巡回を始めた時刻	-	-	11:15	9:33	8:12	8:02	8:45	9:47	9:30	12:15	9:45	9:14	-	9:02	12:21	10:15	9:50	8:20	10:30	11:55	9:10	11:40	-	-	①アハヤブサの飛来・吸水を阻害しているもの
(B) 1回目の吸水時刻	-	-	-	9:35	不明	8:49	9:58	12:08	16:58	12:20	9:48	-	-	9:20	-	-	9:52	8:26	14:13	12:32	-	-	11:40	-	②ウミネコの列車通過しているもの
時間差 (B-A)	0	0	-	:02'	-	:27'	1:13'	2:21'	7:28'	:05'	:03'	-	-	:18'	-	-	:07'	:06'	3:43'	:37'	-	0	0	0	③人の岩礁占
(C) 飛来回数	0	0	1	9	3	12	10	6	10	11	3	-	-	11	1	2	5	9	12	3	0	0	1	0	
(D) 吸水回数	0	0	0	4	-	9	8	3	2	2	1	-	-	4	0	0	2	2	5	1	0	0	1	0	
吸水率 (%)	0	0	0	44	-	75	80	50	20	18	33	-	-	36	0	0	22	42	33	20	0	0	100	0	
同一時間帯の最大固体数	11	72	22	46	45	58	70	81	80	200	150	70	80	19	46	150	25	150	192	25	45	72	22	0	
備考	58'の花火の音で森から飛び立つ	初認日		アハヤブサの存在を確認する様に飛ぶ	※ 8:30 深いところから飛来	早朝霧深いところから飛来	アハヤブサの飛来回数5回も確認	アハヤブサの飛来回数3回も確認	アハヤブサの飛来回数2回も確認	朝の飛来回数150回も確認	アハヤブサの飛来回数70回も確認	アハヤブサの飛来回数80回も確認	アハヤブサの飛来回数19回も確認	アハヤブサの飛来回数36回も確認	アハヤブサの飛来回数0回も確認	アハヤブサの飛来回数150回も確認	アハヤブサの飛来回数25回も確認	アハヤブサの飛来回数150回も確認	アハヤブサの飛来回数192回も確認	アハヤブサの飛来回数25回も確認	アハヤブサの飛来回数45回も確認	アハヤブサの飛来回数72回も確認	アハヤブサの飛来回数22回も確認	0	旋回せず直接吸水する

※ 飛来回数とはある時間帯に同一群が往復した時は全て1回とした。

戸津夫人から、鎌倉のみやげとして小さなハトのマスコットを頂いた。このようなものは、要はハトラしくあればよいのであって、種類を詮索しても仕方のないことであるが、ドバトをモデルにしていることは、一見して明らかである。鎌倉の名物として、ハトサブレーというお菓子も有名であって、鎌倉とハトの縁は深い。その歴史も古く、源氏の守り神であった八幡宮のお使い鳥がハトであったので、源氏が鎌倉に地盤を築いて以来ということになる。神社と鳥が結びついている例としては、他にも、学問の神様である天満宮とウソヤ、熊野神社とカラスがよく知られている。

ところで、八幡神社のお使い鳥としてのハトはキジバトであってドバトではない。「源平盛衰記」に次のような話が出ている。石橋山での旗上げ合戦に敗れた源頼朝が、朽木の穴に隠れていると、梶原景時らが落武者狩りにやってきて、弓の先でその穴をかきまわしたら、キジバトが二羽飛びだしてきた。しかし、景時はその奥に頼朝が潜んでいる姿を認めたが、「ハトが飛び出すぐらいだから、この中には誰もいない」と言って、同行の大庭景親らをうながしてその場を離れたという。その後、梶原景時は頼朝に重く用いられるようになる。

キジバトとドバトの混同の最たる例は「ポッポポ、ハトポッポ。豆がほしいか、そらやるぞ」というあの有名な歌である。古くから日本人がハトポッポと呼んできたのはキジバトであるが、この歌の「豆がほしいか」以下の歌詞は、明らかにドバトの習性にふれている。そして今ではドバトのことをハトポッポと呼ぶ人が圧倒的に多い。

ハトの方も、この混同には、あまり不満は無いらしく、東京に出張すると、ドバトの群れに混じって、キジバトが人間から与えられたエサをついばんでいる姿を時々みかける。時にはヒヨドリと一緒にいることもある。

キジバトのデデポッポという鳴き声に由来する民話は、日本全国にわたって広く分布している。一番よく知られているのは「山鳩不孝」の話であろうか。昔、飢饉のあった年、ワラビの根を掘りに山に行った父親のもとへ、香煎(麦こがし)を子供に持っていかせた。ところが、途中の川で香煎をまくといろんな魚がよってくるので、子供は面白がって持っていたものほとんどを、魚に与えてしまった。その後、あわてて山へ登っていったが、父親はワラビを掘りかけたまま、飢えて死んでおった。それを見て、子供は「父粉(こ)食べっ、父粉(こ)食べっ」といって

泣きつづけ、キジバトになって今も鳴いているという。

また、「でーし恋し」という話は、自分の不注意から弟子を死なせてしまったキジバトの先生が「弟子(こ)恋し、惜(こ)し子を流(なが)したあ」といって鳴いているのだという。

余談になるが、日本で一番多くの異名を持つ草花はタンポポである。この花をデデポッポという呼び名が東北一帯に伝わっている。これは、ツクシのことをわざわざツクツクハウシとセミの鳴き声になぞらえるのと同様の子供の心理からでている。

キジバトに次いで話の多いのはアオバトであるが、これについては、アイヌ民話の方が面白い話が多い。これはアオバトそのものが、北になるほど馴みの深い鳥であるためだろう。

我が野鳥愛護会でも、毎年、張碓での例会があるが、アオバトの水呑み場になっている岩場の右側にある島を今は恵比須と呼んでいるが、元々アイヌの人々はワウシリと言っており、アオバト島の意味であった。アイヌ語でアオバトのことをワウという(ちなみにキジバトはトットである)。アオバト伝説が残されている所として、乙部町の鮎の岬がある。アイヌの娘と和人の若者が恋仲になったが、娘の父親がそれを怒って若者を殺してしまったので、後に残された娘が、悲しみのあまりにアオバトになって、人の呼ぶ声のようにアウアウと鳴いて若者を呼んでいるという話である。

本州でもアオバトの鳴き声を人の呼び声と聞く例が多い。例えば「馬追い鳥」の民話では、自分が面倒を見ていた馬がいなくなった少年が、日が暮れてもアオーアオーとその馬を探しつづけている声だという。但し、一般的に、馬追鳥と呼ばれるのは、「月日星ホイホイホイ」と鳴くサンコウチョウの方が多くようである。アオーでは馬を追うという感じはしないが、ホイホイホイになると追うという感じが、もっとはっきりするためだろう。



〒064
札幌市中央区
南14条西26丁目

近況報告

泉屋 恵津子

1月25日晴、藤の沢の白鳥園で野鳥愛護会の新年会が行われていた。午後立ち寄りて会費を納めて帰る。幹部の面々が集っておられた。

“ヤマガラはきていたかい”と私は聞いた“きていたよ”と主人は言った。カケスが園の高い木に4、5羽静かに羽を休めていた。車の前のガラスにツツツと白い影、2羽のハクセキレイが電線を後になり先になったりして渡りあるいている。まるでシオカラトンボのように、銀色の羽を光らせてたわむれ飛んでいる様は白雪の小山にはえてとてもきれいで美しい眺めである。

一羽が園内のサクラの木にツツツと山形をえがいてとんで行った、午後の小鳥の村はクリーム色の日だまりの中に静であった。

小沢園長のおじいさん、いつまでもお元気で夏になったら又「おしどり」を見せてもらいに伺います。

この日の帰り私は、西区に車を走らせていた途中旭が丘の南8条通を通った。日は西に暮れかけていた。アカシヤの街路樹のコブと並んで丸くふくらんだ鳥の影を見つけた。2、3、4、5“あっ赤い”主人は車を止めて図鑑を片手にして降りて行った。

“たくさんいる、コブだらけの高い木の下のイボタの木に十数羽”のギンザンマシコが黒い実を食べていた。グレーの体に赤いケープを頭からすっぽりかぶってケ-

プの裾には赤いフリコジをたくさんさげて、なんてかわいらしいのでしょうか。めすは、黄いケープを着ている。新しく会った小鳥の姿に感激して見とれていると、よその坊やとパパが戻って来て一緒に眺めた。給餌をすませた鳥はつぎつぎと木のコブに並んでズングリ丸くなってとまりはじめた。冷めたいお腹の中のイボタの実をつつみこんで、あたためているように、西日はマンションの間にすっかり暮れていた。

我家の餌台には今年もたくさん的小鳥達がきてくれる。去年の暮にヒマワリの種を20キロ用意したが、残り少なくなったので、もうひと袋買わなければと話し合っている。

オンコの実がついていた秋の頃はよく姿を見せてくれたヤマガラが又きてくれないかなあーと待っている。

頭の上に黒い羽をボンボソのせたヒガラが1羽、毎日来てくれる。新雪の上に小羽が風に舞っている。ハイタカが来ていったらしいと言う、かわいそうなことをしたと思う。

今日も早朝からシメの群が20羽にぎやかにこのこと肩でのして餌台の上でスズメと仲よくえさを食べている。

〒061-22 札幌市南区藤野6条6丁目550~45

「ベランダに来る小鳥たち」

— 高橋さんの遺稿を読んで —

高崎 一夫

高橋さんが、61年1月に急逝された。満80才である。官・業界で長く土木関連の要職を果たされた。戦後、しばらくして藻岩山麓に居を定められた。仕事で道内を回られた折とか、休日を利用して近くの山や路端の、身近かな野草や山木を、コツコツと採集されるのがお好きであった。

長い年月には種類もかなりとなり、それら、総ては自ら庭に配置し、自然そのものの風情だったという。庭には当然、野鳥たちが寄り集り、その種類も30種にのぼり町内の評判になったという。

高橋さんは小学生の頃、雀の雛を育てた体験を美しく書き遺されている。幼少から自然と親しみ、愛することの楽しさを、大切に身に付けておられたらしい。

その庭作りも、一般のそれとは目的が違っていた。主眼は、あくまで“自然”におく方式だったらしい。それでも夏の夜など、水銀灯をしつらえた庭の景観を肴に、

晩酌を共にされるのが至上の楽しみらしかった。

庭の“来客”が殖えはじめ、餌台を設けて野鳥たちのため、心を配った。高橋さんはこの遺稿の最後で、給餌についてのご意見を概略次のように述べておられる。

『野鳥の餌付けに対しては、反対派と賛成派がいる。反対派は学者や農民に多い。賛成理由はとにかく、反対派には、自然の生態系を乱してしまう点をあげている。これに対して賛成派は、いつも素朴な疑問を投げかける。人間は自分たちだけの、社会発展のための発想で、彼らの生存を脅かしている。地球生物の生態系を今のように破壊してしまった元凶の人間が、わずかの給餌によって、飢えた野鳥の生態系の乱れに心配するのは、おこがましい。野鳥たちは確実に減少を続けている。これを食い止めるためにも、今こそ人間は贅沢な食糧の中から、ほんのひと握りを、彼らに与えることこそ、人間社会の責任でないのかと思う。この論議の当否はとにかく、こんな

ささやかな給餌が、野鳥たちの野性を失わせ、生態系を乱すほど、人間社会に被害を及ぼすようなことが起り得るだろうか。もう一度、人間社会全体で考えるべきテーマのひとつであろう。』

高橋さんが69才のとき、それまでの古い住居から、近くに出来た老人ホームに移られた。しかし、近代的設備を誇る理想的な施設に対して、厳しい批判を周囲の方に洩らしていたらしい。ただ、居住するだけなら、申し分ない条件だろうが、どうしても人間的な面で欠けているのが不満であつたらしい。

そこで、この不満解決のため、こんどはホームのベランダに再び、野鳥を呼び寄せる計画を立てた。難事業である。野鳥たちが安心して寄り付ける目安となる雀が、コンクリートの固りのどこに棲みつけるのか。

たまたま、ヒマワリの花殻にきたコジュウカラにヒントを得て、雀の代役をさせることにし、幾多の苦心の末餌付けに成功した。“来客”の殖えてゆく状況を温い目で、精細に、しかも厳しい観察眼で描写し、ユーモラスな筆致で表現した、珠玉のエッセイとなっている。

高橋さんは、真の自然人の一人であろう。このように無類な愛鳥精神の持ち主であったが、現役当時の趣味は、北海道の山野に育っている、ありふれた草木に興味をもって採集し、育成することだった。

「北海道・身近かな自然・野草と山木」という、専門学者に劣らぬ名著が51年に発行されている。単なる植物図鑑としてでなく、内容から著者の人間性の滲み出た、人生を深く洞察した哲学書に出会った感動さえ与えられる。

高橋さんとは、実は、全く面識はない。しかし、高橋さんの在職中の後輩で、最も親しくして貰っていた友人と、もう一人の友人がたまたま昔、隣同士だった関係で、高橋さんのお人柄がよく想像され、いつも心のうちで、深く畏敬を感じていた。高橋敏五郎・明治39年生れ・北大工学部卒・北海道開発局建設部長。北海道建設業信用保証会社社長・山形県出身

〒064 札幌市中央区宮の森4条7丁目2-35

小樽港にコクガン渡来

富川 徹

昭和61年12月23日、小樽港第2号埠頭でコクガン1羽を観察した。本種はシベリアの北極海沿岸地方に分布し、本邦には冬鳥として渡来する(清棲、1978)。北海道では風蓮湖、尾岱沼および函館湾などで知られており、これまでの海岸線での調査がまだ不十分ではあるが、北海道の日本海側からの観察例はおそらく初めてと思われるので報告する。

良く晴れた午前11時頃、2号埠頭でアビ、ホオジロガモ、ヒメウなどを観察していたところ、白黒明瞭な少し大きいガンカモ1羽が「グルルルー」と一声発して30羽程のホオジロガモ群の付近に着水した。一瞬「何だろう!」と思い、双眼鏡とプロミナーでよく確認すると“コクガン”と知り、すぐに写真撮影を行った。はじめのうちはホオジロガモやヒメウと寄合っていたりしていたが、しばらくすると1羽で埠頭岸壁の脇に来て、そこに付着する海藻(アオサ類など)を食べる採餌行動をとった。この間、水中に嘴や頭を突っ込んだり、両羽根をひろげはばたくなどの動作も見られ、撮影のために接近してもあまり警戒する様子がなかった。

観察したこのコクガンは喉にある白色斑の状況と上面(背)が淡色の横しまであることからみて、成鳥羽前の若鳥と思われる。

なお、翌年1月5日および8日に、同所でこの個体と思われる1羽を当会会員らによって確認されているが、



その後の10日、17日、24日、31日には確認されていない。

おわりに、本種の渡来情報等にあたり、御教示くださった帯広畜産大学の藤巻裕蔵助教授、野生生物情報センターの小川巖氏、日本野鳥の会小樽支部の中野高明氏、当会副会長の柳沢信雄氏および当会会員諸氏に厚く御礼申し上げます。

<引用文献>

清棲幸保、1978. 日本鳥類大図鑑、II. 東京、講談社
高野伸二、1984. フィールドガイド日本の野鳥. 東京、(財)日本野鳥の会

〒064 札幌市中央区北6西28 円山北町団地3-203



野 幌

61. 10. 26

石田 千穂

森林公園の近くに住むようになって二年、何度も公園に散歩や、ジョギングに行っていました。

その度に出合った植物等は、何とか図鑑等で、名前を知ることができましたが、小鳥の方は、なかなかそうはいきませんでした。そんな時に、森林公園にて、自然観察会があると聞き、参加させて頂きました。

歩き始めて、まもなく「アカゲラ」が、道路に生え出ている枝に飛んで来て、沢山の見物人を気にする様子もなく、しきりに枝の上を動きまわっていました。

その後、色々な鳥がさえずり、木の間をいきかっているのを見ましたが、その姿を、望遠鏡に入れるのがむずかしく、肉眼では、茶色の鳥とか灰色の鳥としか見えませんでした。名前を教えて頂き、家に帰ってから図鑑と照らし合わせて、その姿のカラフルなのにおどろかされました。

お昼の鳥合わせの時には22種類もの鳥の名前があがり私が実際に見る事が出来たのは4種類だったので、そんなにもいたのかと、おどろいたり、またガッカリしたりでした。が何度か参加するうちに、その数も増えるよ、

とはげまされ、また参加させて頂きたいと思っています。

出発点に戻った所で、ハシブトガラが数羽、すぐ近くまで来ていて、しばらく、その可愛いしぐさに見とれ、娘と二人満足して帰って来ました。どうも有難うございました。

〔記録された鳥〕トビ、ハイタカ、ヤマゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、ルリビタキ、ツグミ、キクイタダキ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、ウソ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上23種

〔参加者〕佐藤彰夫・まり子、渋谷弘子、村野紀雄、長谷川涼子、金野 弘、柳沢千代子、道川 弘・富美子、国本昌秀、富川 徹、星野加奈、山内元子、青江 正、大野信明、香川 稔、田中礼子、浪田良三、井上公雄、竹内 強、戸津高保・似知子、羽田恭子、佐々木武巳、永井 愛、大浦美佐子、沢田浩一、堀内 進、石田千穂・千華、福岡研也・玲子 以上32名

〔担当幹事〕堀内 進、福岡研也

〒004 札幌市白石区厚別東1条5丁目

ウトナイ湖

61. 11. 16

畠山 大樹 (小学6年)

11月16日、ウトナイ湖で探鳥会がおこなわれました。ぼくは初めてのさん加だったのでどんな鳥が見られるか楽しみでした。しかし、午前10時に集合できず少しおくれたため、1部見られませんでした。いろいろな鳥が見られてとても楽しかったです。湖にそってネイチャーセンターへむけてすすむコースをとりました。途中で、オオハクチョウ、コハクチョウ、などいろいろな水鳥やトビやハシブトガラなどの鳥も見られました。ネイチャーセンターにつくとまず昼食をとりました。それからひと休みして、またもときたコースをもどりました。もどるとき見られた鳥はくるときとだいたい同じ鳥でした。もくてきちにつくと、とおくの鳥のむれの中に一羽だけちがう鳥がいました。迷鳥のアネハヅルでした。なかまのむれにうまくもどればいいと思いました。探鳥会が終わりかいさんしてから、行きたい人たちだけが、北大演習林にいきました。そこには、カケスが多いところでした。と中でオオタカなどが見られウソなどは、ほんの2、3メートルのきょうりで見られました。ほかにクマガラの

すなども見られました。かえりにアカゲラ、オオアカゲラ、ヤマゲラ、などキツツキ類などが見られました。愛護会の人が「これだけ見られれば、うんがいい方だ」と言ったのでぼくは、うれしかったです。とにかくとってもおもしろい探鳥会でした。最後に愛護会のおじさん、どうもありがとうございました。

〔記録された鳥〕アオサギ・ヒシクイ・オオハクチョウ・コハクチョウ・マガモ・カルガモ・ヒドリガモ・オナガガモ・ホオジロガモ・ミコアイサ・カワアイサ・トビ・オジロワシ・オオタカ・ハイタカ・チュウヒ・カモメ・アカゲラ・ツグミ・エナガ・ハシブトガラ・シジュウカラ・ゴジュウカラ・ベニヒワ・ウソ・スズメ・カケス・ハシボソガラス・ハシブトガラス・ダイサギ・アネハヅル・アメリカコハクチョウ・アメリカヒドリ・コブハクチョウ 以上34種

〔参加者〕道川弘・富美子、田中金作・礼子、武沢和義・佐知子、柳沢信雄・千代子、谷口一芳・登志、畠山大樹・幸江・大樹、岩崎節子・裕治、戸津高保・似知子、井上

公雄、清水朋子、大野信明、園部恭一、森岡弘光、西秀司、大坊幸七、山田 浩、佐藤 貢、長谷川涼子、小堀煌治、羽田恭子、佐々木武巳、曾根モト、香川 稔、

平島潤也、福岡研也・玲子 以上35名

〔担当幹事〕戸津高保、福岡研也

〒001 札幌市北区新琴似4条6丁目5-18

小樽港

61. 12. 14

中野由美子

冬の世界というと、カモメと雪と波とからなる景色しか思い浮かべなかった私ですが、去年、初めて小樽港の探鳥会に参加して、冬の海のにぎわいに、すっかり魅せられてしまいました。それから、望遠鏡も買ってしまい、暇を見つけては、せっせと港に通っていました。今年もまた、ホオジロガモの一団がやって来てくれました。埠頭のすぐそばで、出たりもぐったり、のび(?)をしたり、ひょうきんな様子で出迎えてくれました。コオリガモの雄が、優雅なしっぽをゆらしながら泳ぎ、愛嬌のある顔をした雌が後に続きます。ウミアイサも頭の羽を風になびかせ、走るように泳いで行きます。もう大満足です。今年はクロガモの群がたくさん来ていました。真っ黒に、くちばしのオレンジ色がくっきり映え、とてもきれいです。海にブクブク浮いているカモ達をみていると、気持ちよさそうで、私の気持もポカポカになります。アビがいました。始めてみます。冬羽のアビは地味ですが、シックで味わいのある鳥でした。祝津の海岸では、シノリガモはあまりたくさんいませんでしたが、ウミスズメがたくさんいました。一列に並んだり、くの字になったり、一せいに、べしゃんともぐったりする様子がとてもかわいかったです。冬の世界に会いに出会って、まだ二度目の冬を迎えたばかりですが、もう夢中です。今年の冬は、今か、今か、と、カモがやってくるのを待ちかねていました。今回、友達もさそって参加しました。二人ともバードウォッチングは始めてでしたがとても喜んでくれました。すぐ身近に、こんなすばらしい世界が広がっ

ていることを、もっとたくさんの人に知ってもらいたいと思いました。

〔記録された鳥〕アビ、ハジロカイツブリ、アカエリカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、クロガモ、シノリガモ、コオリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、ユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、カモメ、ウミネコ、ウミバト、ウミスズメ、ヤマゲラ、ハクセキレイ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上24種

〔参加者〕雨夜美千子、宇田直江、加賀文子、川村耕治・純世・敏之、清田吉晴、後藤ひろみ、志田範三、霜中愛子、高橋里子、竹内喜代治、津田新平、富樫敏雄、中野高明・由美子、鍋島由次郎、西岡正子、吹田長四郎、松山佳則、大和民承、渡辺俊夫・恵子、武田忠義、江草真治、小泉真美、曾根モト、谷口登志、戸津高保・以知子、大坊幸七、畠山弘樹・幸江・大樹、清水朋子、林 俊郎、杉田範男、松井 昌、園部恭一、松本六郎・美智子、伊藤恭子・聖子、小須田秀子、今野 弘、矢野玲子、西川喜久世、山田 浩、国本昌秀、小堀煌治、岩泉ゆう子、長谷川涼子、羽田恭子、田中礼子、猪師 勉、難波茂雄、中島三代、竹内 強、武沢和義・佐知子、大浦美佐子、大野信明、松田元助、佐々木武巳、高梨敏子、富川 徹、高田雅之・早苗、柳沢信雄・千代子、井上公雄、杉浦嘉雄、佐藤 貢 以上73名

〔担当幹事〕中野高明、渡辺俊夫

〒047 小樽市清水町36-31

楽しい白鳥園の一日(藤の沢) 62. 1. 25 岩山 英輝

前日、酒を飲み過ぎたせいで朝寝坊をしてしまった。家内が、「お父さん、大雪ですよ。」という声で目がさめ、外を見ると車がすっぽり雪に埋まっている。これは大変だ。雪かきを大急ぎでやり藤の沢の白鳥園へ出かけた。定刻より少し遅くなったが広い部屋も一杯になっており、ようやく席を見つけて座った。

今年で二回目の参加であるが、不勉強のせいで鳥の姿と名前が時々一致せず、まわりの人たちと話をするとすぐボロが出てくるのだが、そこは自分なりに割り切って探鳥会とは、小鳥たちの美しい姿と可愛い鳴き声を楽し

む為に存在するなど勝手な理屈をこねて参加している私である。

開会のセレモニーが終り、いよいよ小鳥たちを見る時がやってきた。めいめい窓に寄って行き、ガラス越しに「あ、きたきた。」と話している。キジが美しい羽を見せながら雪の中を飛び回り、そして雪原の中に立った。何をしているのかなと思いつつも、私はたくさん見なけりゃ損だ等と考え、あっちの窓、こっちの窓と飛び回って見ては、「あれは昨年見たのと同じかな、それともその子どもかな。」などとたあいもない事を考えながらは

見て喜んでいる。また、そばにいる御婦人の話を夢中になって聞いている、少しは小鳥に対する知識が増えたのではと自賛したりして。そのうちに昼食となる。

入口のそばのストーブで朝から仕込んでいた豚汁ができあがった。味噌の味のしみこんだ豚汁は、とっても香ばしくおいしい味でした。2回目のおかわりをする頃には、アルコールの回った元気のいい声があっちのテーブル、こっちのテーブルと野鳥談義が続いています。

余興が始まりました。幹事さんが工夫したのでしょう野鳥のクロスパズル、そして足跡クイズ等野鳥に関するクイズそして景品。1つぐらいいはあててやろうと

必死に考えたのですが、私のレベルでは無理。でも来年同じ問題だったら絶対賞品を取るぞとしたりして。

最後に、会のステッカーを作った方からいただいたのですが本当に素晴らしいデザインでした。まわりの方は知らない方ばかりでしたが、すぐうちとけて話をしたので4時間近くの時間があつという間に過ぎてしまいました。来年も藤の沢の白鳥園で小鳥たちと皆さんと一緒に会いましょう。

〔記録された鳥〕キジ、ヤマゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上14種



撮影 星野 義直

〔参加者〕戸津高保・以知子、竹内 強、堀内 進、熊木大仁、柳沢信雄・千代子、犬飼 弘、曾根モト、田中礼子、星野義直・裕子・加奈・有美、永井 愛、井上公雄、佐々木武巳、富川 徹、小堀煌治、山田 浩、西川喜久世、武沢和義・佐知子、国本昌秀、渡辺加奈子、大野信明、清水朋子、福岡研也・玲子、岩山英輝、中畑敏夫・和子、高梨敏子、霜村耕一・佳代子、羽田恭子、上村優子、塚原英代、渡辺照彦、村野紀雄、小沢広記、道川富美子 以上42名

〔担当幹事〕戸津高保、竹内 強、道川富美子

〒005 札幌市南区南沢3-3-6-10

頭を休めて、こんなのは
いかがですか。
藤の沢探鳥会で楽しんだ
パズルです。

鳥見行クロスワード

出題 竹内 強

ヨコのかぎ

1. 赤い帽子を被った、黒い奴。
2. ○○行、○○首とかいいます。鉄砲のこと。
4. 大形のカモメ、足は黄緑色で、頭は黒い。
5. ○○○マ。ハチを食べるの？これでもレッキとしたタカの仲間です。
6. 長良川では鮎取り名人です。
9. コウ○○○○○○、ウグイス色はしてないね。どちらかといえば黄色みたい。
10. ギョギョッ、ギョギョッと鳴くのは大きい方、こいつは河原のジャズシンガー。
13. ○○○○タキ。とても礼儀正しい鳥です。夫婦揃って紋付を着てますから。
16. 断崖の狩人。もみあげのようですが、○ヤブ○ヒゲといえます。

1		8	11		14		17
		9					
2							
		10					
	6						18
3				12		16	
4	7				15		
5				13			

答えは14 P. にあります。

タテのかぎ

1. オスは嘴の上に黄色い飾りをつけてます。
3. 白い襟のあるのは、瀬戸内海で漁師をしています。○○○ム。
7. オ○○ドリ、小さいのは16cmでチドリ類最小。でも、これは最大じゃないよ！
8. コ○○、アカ○○、つまり○○とはキツツキのこと。
10. 開けたところが好きな冬に来るフクロウ、決して大きくないそうです。

11. 北海道にいるのは冬になっても白くなりません。
12. ホーイ、チヨチヨ。
14. 顔が白ければハクセキレイ。黒ければ○○○セ○○イ。
15. オ○○シガモ。地味なんだけれど、とっても素敵。
16. ○リ○モチュ○ジャクシギ。
17. 鳴くと羽に白い線がでます。嘴が…。
18. 三人兄弟の中で、一番小さくて、お中が白い。○○○○タキ。



〔野幌森林公園〕

昭和62年 5月10日(日)

夏鳥達が次々と姿をみせてくれます。昨年は大沢園地でカワセミが巣づくりをしていて、その姿をよく見る事ができました。

たし、松川の池ではオンドリも見れましたが今年はどうでしょうか。キタコブシやサクラの咲く中でのウォッチングも良いものです。

午前9時 大沢駐車場入口集合

〔植苗ウトナイ〕 昭和62年 6月14日(日)

さわやかな初夏の風が吹きぬけるウトナイ湖畔を植苗側から(ネイチャーセンターの対岸側)歩きます。草原の鳥達の宝庫といった感じで、シマアオジ、ノゴマ、オオヨシキリなどが姿を見せ、湖ではカイツブリやカモ類も見られます。

午前9時10分 国鉄千歳線植苗駅前集合

〔東米里〕 昭和62年 6月21日(日)

年々宅地化が進み、鳥達のいる場所もせばまっています。草原の鳥達がまだみられます。昨年はカッコウがモズに追われて飛ぶのを見かけました。たく卵をとがめられたのでしょうか。例年アリスイヤアカモズを良く見かけます。

午前9時 市営バス米里線東米里小学校前停留所集合

〔平和の滝 夜の探鳥会〕 昭和62年 6月27日(土)

昨年始めて夜の探鳥会を野幌で行ないました。今年は平和の滝です。ここはコノハズク(声のブッポウソウ)が鳴き、なかなか聞くことの出来ないクロジやマジロのさえずりも聞かれそうです。

午後6時30分 市営バス西野平和線

平和の滝駐車場集合(平和の滝入口下車徒歩20分)

〔福移〕 昭和62年 7月5日(日)

札幌の郊外で豊平川が石狩川と合流するあたりを歩きます。今年は例年よりも川岸の雑木林がへっていますが牧草地ではノビタキ、ホオアカ、コヨシキリなどが見られ、またウズラの声も良く聞けるでしょう。

午前8時30分 市営バス札苗線福移入口停留所集合

〔野幌森林公園を歩きましょう〕

昭和62年 5月24日(日)、6月7日(日)、7月12日(日)

午前9時 大沢駐車場入口集合

いずれの探鳥会も暴風雨でないかぎり行ないません。昼食、筆記用具、観察用具をご用意下さい。

探鳥会のお問い合わせは、戸津011-831-8636まで。

〔千歳川周辺一泊早朝探鳥会〕

他の探鳥会と比べ、やや歩く距離はありますが、1回の例会としては最も多くの鳥が見られます。(昨年61種)ぜひ御参加下さい。

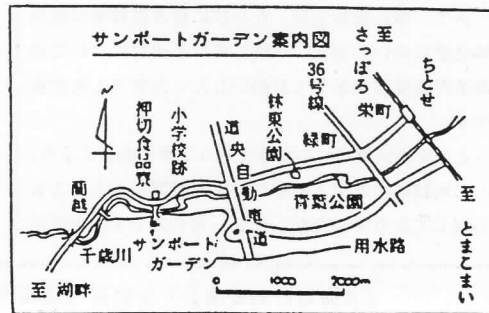
1. 日 時 昭和62年 5月16日(土)午後7時より
17日(日)午前4時から探鳥開始。午前中解散予定。
2. 場 所 サンポートガーデン
千歳市蘭越町5番地 電話 01232-3-3741
3. 会 費 2,000円 夕食付(ジンギス汗鍋)朝食は各自持参

※ 宿泊設備がないため(畳の部屋はあります)寝袋などをご用意下さい。

※ 自家用車の方は直接サーポートガーデン集合(駐車場あり)

列車・バスの方は午後6時30分国鉄千歳駅待合室集合。駅から現地まで、タクシーを利用します。

※ 参加申込 4月と5月の野幌森林公園探鳥会の折受付ます。電話の場合は5月14・15日(午後7時30分から10時までの間)電話 011-831-8636 戸津高保まで。





◆定例幹事会報告

1月から3月まで毎月、札幌市民会館会議室にて行いました。写真展及び総会の開催に関する具体的討議、然別湖伐採問題への対応等が中心になりました。

◆総会のご案内

昭和62年度の総会を下記のとおり開催いたしますので参加下さるようご案内します。

日時 昭和62年4月18日(土)午後2時～

場所 札幌市民会館会議室(札幌市中央区北1条西1丁目)

内容 昭和61年度事業経過報告
昭和62年度事業計画

◆62年度写真展の会場・期間・×切り日変更

写真展については、野鳥だより66号にてご案内いたしました。その後次のとおり変更がありましたのでお知らせします。

●開催場所と期間

○たくぎん本店地下キャッシュサービスコーナー
(札幌市中央区大通西3丁目) 4/20～5/2

○三菱信託銀行札幌支店
(札幌市中央区北4条西4丁目) 5/11～5/22

×切り 4月11日(土)まで

他の応募要領に変更はありません。

◆然別湖伐採問題に対し要望書を提出

昨年の11月に本会々員で上土幌町に住む川辺百樹氏から然別湖北岸において実施、計画されている伐採について営林署などに見直しを求めている旨の提言がありました。

この提言に対し、幹事会及び役員会で協議のうえ次のとおり帯広営林支局及び清水営林署に対し要望書を提出しましたので遅くなりましたがお知らせします。

時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、帯広営林支局、ならびに清水営林署が然別湖北岸において実施、計画している伐採について北海道野鳥愛護会としてお願いいたしてお便りした次第です。

この度の伐採についてはマスコミ等の報道により、この地域に生息する動物に対する影響を会としても心配しておりましたが、先日、本会の上土幌町に住

む会員から今回の伐採は貴重な動物に悪影響を与えることは必死との指摘が有り、会としても放置できない問題と考えざるをえません。

今回の伐採地は第三種特別地域で、伐採の制限は法的には無いということは承知しております。しかし、絶滅さえ心配されているシマフクロウ、クマガラ、ミヤベイワナ等国民の財産でもある貴重な動物に悪影響を及ぼすような伐採だけは避けていただくよう強く要望いたします。

つきましては地元で熱心にこれらの動物を観察し、保護しようとしている人達の意見を十分に聞いて後世に悔を残さぬよう特段の配慮をお願いするものであります。

北海道野鳥愛護会

◆ご寄付について

昨年12月に永眠されました故北尾 諭氏の御遺族から、会の活動に役立てて下さいとのことで本会に対し10万円のご寄付がありました。会のために有効に使わせていただきます。誠にありがとうございました。

◆寄贈図書について

日本白鳥の会より元同会副会長・大森常三郎氏の著作集「白い鳥ーハクチョウと共に40年ー」のご寄贈がありました。どうもありがとうございました。

◆お詫び

○66号7頁、木内恵美さんは木田恵美さんの間違いでしたので、お詫びし訂正いたします。

○66号発送時、一部の方に郵送料金不足のまま発送し、ご迷惑をお掛けしました。お詫びいたします。

答

1	ク	マ	8	ゲ	11	ラ		14	セ		17	イ
	ロ			9	ラ	イ	ウ	グ	イ	ス		
2	ガ	ン				チ			ロ		カ	
	モ			10	コ	ヨ	シ	キ	リ			
			6	ウ	ミ	ウ		レ			18	コ
3	オ				ミ		12	ク		16	ハ	サ
4	オ	7	オ	ズ	グ	ロ		15	カ	モ	メ	
5	ハ	チ	ク				13	ジ	ヨ	ウ	ビ	

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 1,500円 (会計年度4月より) 郵便振替 小樽 1 - 18287
☎060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465